

センター利用の現状と将来計画

計算機センター長 武 部 幹

昭和57年度4～11月の計算機センターの利用状況を眺めると、次の2つの面が見られます。第1に、56年9月のM-160よりM-170Fへの更新によるCPUの速度向上とTSS端末の大幅増設とにより、4～8月はJOB処理件数が毎月前年の2～3倍に達し、9月以降も前年の50%以上増と非常に活発な利用が見られます。従来は年度前半は比較的使用が少なかったのですが、本年度は6月より、もうシステムの能力の限度一杯に達する利用がある状況です。第2に、日本語ラインプリンタによる図形の出力が一般化し、またATF（数式を含む英語論文の編集清書システム）、日本語情報処理システムの利用による和英論文、資料の編集・清書の利用が増えてきています。

この第1の面に対処するために、本年よりM-170Fに高速演算機構を付加して処理速度を2倍とし、また磁気ディスク装置も新しい1.8GBの大容量ディスク装置4台に更新し、TSS端末も21台増設する事に致しました。しかし日本語ラインプリンタの増設は、レンタル料アップが認められないと実現出来ません。

第2の面については、現在これらの利用はセンターにおいてのみ可能ですが、明年度からは城内、宝町両分室にオフィスレーザービームプリンタを設置して、日本語処理の利用を可能とし、また英数字も含めNLPと同様な鮮明な印字を可能とする予定です。図形出力については、ソフトウェアの開発を待たねばなりません。また本年4月からは、DDX網に加入し、各大型計算機センターの文献等のデータベースの利用が便利になる予定です。

以上の実現は、マイクロエレクトロニクス技術の急速な進歩によると共に、限度一杯の校費持出しによるレンタル料の増加によるものです。

計算機センターの将来計画は運営委員会において1979年7月に策定され、本年11月に改定されました。それは総合情報処理センターを目指すもので、次のようなものです。総合移転先の広大なキャンパスに総合情報処理センターの建物が建設され、超高速、大記憶容量の計算機システムが設置されます。センター内には、多数のTSS端末が設置され、教職員、学生の研究用ならびに学生の一般情報処理教育用に利用されます。センターと各分室、各部局間には、光ファイバーによる高速通信回線が設けられ、各学科・教室単位にノードを設け、学科、教室、講座の所有するマイクロコンピュータ、ワードプロセッサ、ファクシミリ装置と総合情報処理センター間の通信の機能を持たせ、データ処理以外に日本語処理、文書伝達の効率化をはかります。センターと各分室間にはビデオ網を設け、音声と画像により、通信が出来ます。センターには金沢大学で生産、収集された諸分野の学術情報のデータベースが建設され、また高速データ通信回線により全国大型計算機センター等のデータベースの利用が可能となります。センターの研究開発部には、計算機システム部門、図形画像処理部門、応

用プログラム部門の3つを設け、特に大量の演算処理を必要とする図形画像処理は研究室単位では処理不可能と考えられますので、全学の各研究者の要望にそうように入、出力機器、ソフトウェアを整備致します。

以上は総合移転後の姿を描いたものですが、それに至るまでの間も、このような処理形態に近づけるようセンター設備の拡充を行かなければなりません。本分冒頭に述べた様な事情で、センター業務はパンク寸前の状態です。差し当たり現センターの建物で、早急により大型の計算機への更新が必要であります。センターの移転に向けての進め方は今後運営委員会で検討して行くことになります。現に行いつつあるサービスを休止しないで移行する為には、関係各位の絶大なお骨折りと御協力が必要なことは申すまでもありません。総合移転を実施した大学の例などを参考にして、最善の方法で進めることを念願しています。